

## 違和感と共感を通して

### みえてくるもの

浅井 利之

昨年は本国においてそれぞれ高い評価を受けている作品がYAを中心に数多く翻訳された。また日本で初めて紹介された作者も多く、新しい書き手の作品を積極的に取り上げ、紹介しているところとする動きが一昨年同様続いている。

まず、独自の視点で人間の内面を照らし出した作品からみてみたい。『小さな可能性』（マルヨライン・ホフ 野坂悦子訳 小学館）のキークは、戦場に医師としてむかっただ親を心配し、父親とベットが死ぬ可能性は小さいことから、ベットが死ねば父親の死の可能性を小さくできると考える。残された家族それぞれの思いを描くと共に、不安のなかで判断力を失い、思い込みや想像で行動してしまう危険性に気づかせる。『くじらの歌』（ウーリー・オルレブ 母袋夏生訳

岩波書店）では、ミハエルの祖父の「夢のちから」が語られる。祖父はみずからの夢にミハエルを招き入れるだけでなく、夢を修理することができるのだが、物語からは夢をコントロールすることの大切さを読み取ることができ、人間の「あかるい側」と「くらい側」など、作者の人間観が幻想的な物語を通してみえてくる。また、おとなしく素直な主人公のリジーが犯罪に加担する『コブタのしたこと』（ミレイユ・ヘウス 野坂悦子訳 あすなろ書房）では、子ども「悪意」や、友情や仲間意識のもつ負の側面など、児童文学では描かれることの少ない心の闇に光を当て、こころの弱さや孤独、支配するものとされるものとの関係を丁寧に描き出す。また、『わたしの世界一ひどいパパ』（クリス・ドネール 堀内紅子訳 福音館書店）では、文字通りの悪人パパやなんとも情けない大人たちが描かれ、違和感を通して読み手の認識を問う個性的な作品世界をみせている。

肉親の死や人生の選択により、環境が大きく変わるなかで自分を見つめ、問い直す作品も多くみられた。『はみだしインディアン』のホントにホントの物語』（シャーマン・アレクシー さくまゆみこ訳 小学館）のアーノルドは、保留地を出て白人の学校に通うことを選択するが、インディアンとの社会と白人の社会の間に立つことで、社会と同化することなく問題を直視し、みずからの夢の実現を目指す。ユーモアに富んだ軽い語りゆりのなかに仲間への深い思いが伝わる